

仁木町 前田 将克 さん

北海道民泊事例集 -人とふれあい、地域とつながる- 2

「走る楽しみ」「とまる楽しみ」



自己紹介



出身は兵庫県。走るのが大好きで、「走っているところに行ってみよう」と思っていました。19歳の時に、1年半かけて、ついにランニングで日本一周を達成しました。旅の道中で、一番思い出に残ったのが北海道。

走ることで出会えた北海道で、今度は「走る楽しみ」を伝える活動がしたいと思い、地域おこし協力隊に応募しました。ご縁があって、平成29年から仁木町で暮らしています。仁木町は、ワイナリーなどの産業が育ちつつあることや、新幹線や高速道路の延伸を控えていて、伸びる町だと思っています。

民泊を始めたきっかけ

地域おこし協力隊として働き始めて、業務のなかで空き家問題について調べ、空き家を活用したビジネスで自分が何か役に立てないかと模索していたとき、住宅宿泊事業法が施行されると知り、民泊に興味を持ちました。

するとちょうどいいタイミングで、町民の方から、持っている空き家を活用してほしいと町役場に相談があったんです。役場の方にも背中を押され、この若さで家持ちとなりました(笑)。家の登記や税金などの手続きも自分でしたので、いろいろ勉強になりましたね。

住宅を取得してからは、古い家財を片付けたり、仕事の合間に水回りなどを自分で少しずつリフォームしました。以前に就いていたリフォーム関係の仕事の経験を活かすことができました。

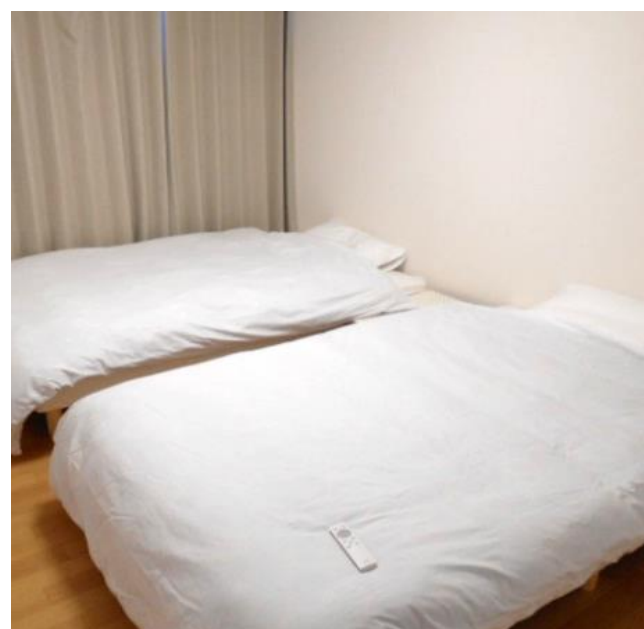


民泊をやってみて…

主に、町内への移住体験を行う方を受け入れています。印象に残っているのは、都会から来た方で、不眠に悩んでいたそうなのですが、ここに宿泊したときに「朝、すごく気持ちよく起きられた」と喜んでいました。「時間の流れがゆっくりに感じられて、心地よかった」そうです。僕にとって、夜に静かなこと、真っ暗なことはもう当たり前になっていたもので、新たな気づきでした。

他にも、一緒にワイナリー巡りをしたり、小樽市まで足を伸ばしてお寿司屋さんに行ったこともあります。地元のワインと一緒に飲んだり食べたりしながらおしゃべりをするのも楽しみです。

また、地域の方々が「民泊やるんでしょ」「お客さん来てるかい？」と声をかけてくれ、応援してもらっていると感じています。



仁木町のおすすめ

仁木町では果物狩りやトマトの収穫体験が日帰りでもできますが、町内に泊まればもっとたくさんのアクティビティを楽しんでもらえると思います。ゆっくり滞在してもらい、いろいろな体験を提供できるのが、民泊のいいところ。

僕が民泊を行っている銀山地区だけ見ても、夏は農業体験、川で釣りもでき、冬は裏山でスノートレッキングができます。町内にはスキー場もあります。スキーは近くのニセコやキロロが有名ですが、実は仁木も雪質がすごくいいんです。穴場ですね。



マラソン+ピクニック=「マラニック」

走るスピードは、景色を見るのにちょうどいいんです。「マラニック」は、走りながら果樹園やワイナリーなどが広がる素晴らしい景色を見て、ワインや果物などの地元の食を味わうもので、タイムを競うのではなく町を楽しんでもらうイベントです。道外からも多くの方が参加します。自分のペースで走りながら、仁木の魅力を五感で体験できますよ。



仁木といえばやはり果物とワインが有名です。6月のイチゴに始まり、サクランボ、ブルーベリー、プラム、ブルー、ブドウ、ナシ、リンゴと、10月まで楽しめます。近年は素敵なワイナリーも増え、ワインツーリズムでも大きく注目されています。5月を過ぎると、サクランボやリンゴの可憐な花をはじめ、果樹の花が一斉に咲き誇ります。秋には、町じゅうブドウのフルーティな香りに包まれます。こんな仁木での「走る楽しみ」は格別です。

ご当地バーガー

僕は平成29年から、地域の食材をまとめて手軽に味わえる「ご当地バーガー」の開発を手がけています。パンズは水を一切使わず、仁木町産の赤ワインだけで練り上げ、仁木町産ミニトマトと、お隣の余市町産豚肉100%のパテをはさみました。

ワイン色のパンズは、パン屋さんに協力してもらってレシピを作り上げました。パン酵母とワインはケンカしてしまうので、パンを膨らませるのが大変でした。

札幌や東京などで行われたイベントや、期間限定ショップで販売したところ、お客さんは最初ワイン色のパンにびっくりされますが、「パンがもちもちしていておいしい」「豚のハンバーガーもおいしいんだね」と好評でした。仁木の新たな魅力に育てていきたいです。



今後は…

移住体験として長期滞在していただける方には、民泊を通じて仁木の暮らし、自然や産業などに触れていただき、それが本当の移住につながればとても素晴らしいと思います。アクティビティや食などを期待している方には、仁木の様々な楽しみ、喜び、感動を味わっていただき、再び仁木を訪れてもらえたらと思います。

それから、やはり「走る楽しみ」というのもぜひ発信していきたいですね。